

明治の移民論—横山源之助、片山潜、幸徳秋水を比較して

加賀谷 真 澄

1. はじめに

明治を代表する作家、思想家そして運動家であった横山源之助、片山潜、幸徳秋水は、社会主義の研究会や、社会問題についての勉強会とともに参加した仲間であり、それぞれの交友関係や社会的な活動領域も重なり合っていた。

片山潜が主筆を務めた労働組合期成会の機関紙『労働世界』（1897年創刊）には、横山源之助と幸徳秋水はたびたび寄稿しており、また、片山潜と幸徳秋水は、安部磯雄、河上清、木下尚江、西川光二郎などととも、1901年、日本初の社会主義政党「社会民主党」を結成し、社会の改革に向けて革新的な取り組みをした同志であった。

この「社会民主党」は、わずか二日後に結党禁止され、解散命令が下されるという憂き目に合ったが、片山と幸徳は、より平等で公平な社会を作るという共通の目標を持っていた。それにもかかわらず、時を経るにつれ、二人の方向性の違いは明らかになっていき、のちに袂を分かたつことになる。また、横山源之助も、その作家生活の後半は、貧困問題から移民問題に関心が移り、かつての盟友、片山潜との間に距離が出来ていく。

明治期、多くの知識人が、社会主義を旗印として活動し、グループを形成したが、その後決裂・消滅している。それは、それぞれが思い描いた目標が異なっていたことを意味するばかりでなく、この時代の日本における社会主義という概念の未分化や未熟さ、そして組織の非統制を示している。

しかし、横山源之助、片山潜、幸徳秋水に共

通しているものがある。それは、都市の急激な貧困層の増加や労働問題、そして戦争回避などの国内外の諸問題を解決する策として、移民が有効であると考えていたことである。時には、主義・主張が衝突し、それぞれの立場の違いが明らかであったにもかかわらず、彼らが移民論に行きついたのはなぜなのだろうか。

本論は、明治中期から後期にかけて、彼らが発信した移民論を比較し、さらにその中で「渡米」という言葉を、どのような立場から語っていたのかを考察する。

2. 幸徳秋水、片山潜、横山源之助の協力関係—そして別れ

まず、片山潜と横山源之助、そして幸徳秋水の周辺で、当時の知識人たちのグループがどのように形成され、協力関係へ発展していったのか、そしてその関係がどのように分解していったのかを確認したい。

片山潜は、1896年に留学先のアメリカから帰国して間もなく、社会改良事業に着手する。片山は、在米中にキリスト教に改宗しており、組合派¹のグリーン博士（Daniel Crosby Greene）の支援を得、神田のキングスレー館を拠点にセツルメント（社会事業）をはじめた。その内容は、幼稚園を開いたり、商店の店員に英語講義を開講したりするものであった。片山の幼稚園からは、およそ5~600人卒園し、教え子の店員のほとんどは、のちに渡米したという。² このキングスレー館は、宗教施設として位置づけられていたが、³ 片山は、社会問題についての講演会や勉強会の場として、キング

スレー館を提供するようになっていく。

明治三〇年代は、日清戦争（1894～5年）を経て、日本が本格的に資本主義国家への道へと突き進んでいった時代であり、綿糸紡績業などの軽工業や、鉄鋼業、造船などの重工業において、労働者数が増加していた時期でもあった。そして、それに伴い、幼年労働や長時間労働、低賃金、無権利状態などの労働環境の劣悪さが表面化していった。

片山は、日清戦争後の日本を振り返り、「日清戦役後の日本は、まだまだ労働問題が何者であるかすら解し得ない、従て日本には労働問題の解決に向かっては何の用意もなかった。労働運動の取り締りとか、之が圧迫とか言う政府の方針も又法律も無かった、要するに幼稚な物であった」と述べているが、⁴ 片山のように、アメリカ生活を経験し、資本主義先進国の労働・貧困問題を直接目にして帰国した知識人たちは、社会問題についての勉強会・集会などの集まりを通じてネットワークを築き、有効な策を模索しながら互いの協力関係を固めていった。そして、その成果が一つの形となったのが、1897年に結成された労働組合期成会であった。

この年の7月、片山は、アメリカ生活の経験者である高野房太郎、城常太郎、沢田半之助らとともに、労働組合の中央機関となる労働組合期成会を結成する。会員はその年のうちに1000人を超え、期成会を母体にして、鉄工組合（1897年）、日鉄矯正会（1898年）、活版工組合（1899年）が生まれた。⁵

1897年12月には、労働組合期成会の機関紙『労働世界』が創刊される。そして、創刊第一号（1897年12月1日発行）に、横山源之助が『資本家の言』（一）を載せていることから、この時には片山潜と横山源之助の間につながりが出来ていることが確認できる。

しかし実際には、それ以前から、二人は互いに相手の名を知っており、その存在意識していたはずである。横山源之助の記者としての方向性、そしてその精力的な活躍ぶりを見ると、いずれ片山潜たちのグループと接触を持つ運命にあったと思われるからだ。横山源之助は、1894年に『毎日新聞』⁶ に入社後すぐ、「戦争と地方

労役者」というテーマで、戦争が庶民の生活に及ぼす影響を考察した記事を発表しており（1894年12月8日～1895年1月17日まで計6回）、初めからその関心は、労働者の生活環境に向けられていた。この後、1895年から1898年にかけて日本各地に出向き、その地の労働者の貧困状態・生活環境の調査をしており、『毎日』新聞に発表している。これらの取材記事は、『日本の下層社会』として一冊の本にまとめられ、1899年に刊行された。

横山源之助は、1897年7月の労働組合期成会の創設メンバーではなく、その年の10月に3ヶ月遅れで『労働世界』の執筆者として加わっているが、参加が遅れたのは、『日本の下層社会』出版のため、全国調査で各地を回っていたためと思われる。片山潜は『労働世界』の主筆となるが、社会主義に傾倒していく中で1899年1月1日の号で、「社会主義」欄を設けることになる。この雑誌には、幸徳秋水もたびたび投稿しており、⁷ この頃から片山潜と接点を持っていたことが確認できる。

片山はまた、横山源之助との結びつきも強めていく。1898年6月、日本各地の貧困とその救済政策を討議する場として、二人は共同で「貧民研究会」第一回を発起し、キングスレー館で第一回目の会合を開催した。⁸ ここで、横山源之助と幸徳秋水が、はじめて顔を合わせるようになった。幸徳秋水を見た時の印象を、横山源之助は後に振り返り、「人物印象記」（『新潮』第一五巻第4号、1911年10月1日）で次のように語っている。

僕が「日本の下層社会」を出した前後に、北米新婦朝の片山潜氏と組んで、貧民研究会というのを片山氏のキングスレー館で発表した。第一回には高野房太郎氏も出で、植松考昭氏も出で、松原二十三階堂氏も出で、前掲の片淵琢氏も出た。で、僕は此の会場で、二個の意外人物に接した。意外人物というのは、知名の人という意味ではない。貧民研究に卓抜なる意見を出したという意味でもない。いや、実は名もない一雑兵で、貧民研究者の間では少なくとも僕等の間では何等重きをなさなかつた名面であった。

一は万朝報に秋水の名を以て論説を掲げ初（ママ）めた万朝報記者で、他は報知新聞に新網記事を掲げていた井上某氏であった。⁹

この後、幸徳秋水が流行の装いをした石川半山¹⁰の傍らで「しょんぼり」と佇んでいる姿や、「極めて揚らない風采の人」、「始終無口」いう記述が続く。かなりネガティブな人物描写だが、しかし、横山源之助と幸徳秋水は、ともに『労働世界』の寄稿者であり、同じ研究会のメンバーである。また、片山潜だけでなく、木下尚江などとの交友関係も重なっていた。

それを考えると、横山源之助が、幸徳秋水を知らぬ人のように描いているのは不自然である。しかし、この文章が「大逆事件」（1910年）で幸徳秋水らに処罰が下った後に書かれたものであり、この事件の余波で明治の労働運動・社会運動がダメージを受け、社会全体がまだびりびりしていた時期であったことを考えると、幸徳秋水から距離を置こうとした事情が理解できる。1898年という年に話を戻すと、この年、片山潜は、「貧民研究会」の他にもキリスト教系の社会主義者たちとともに、「社会主義研究会」（1898年10月）を立ち上げている。この研究会は、会長が村井知至、他のメンバーには、河上清、安部磯雄、木下尚江、杉村楚人冠などがいた。そして、「社会主義研究会」にも、幸徳秋水は、メンバーとして参加している。そしてまた、幸徳秋水は、1903年、堺利彦とともに「平民社」を創設し、『平民新聞』を創刊するが、片山潜は、社の同人となっている。

このように、幸徳秋水は、片山潜とともに社会主義、労働運動を日本に導入、定着させるための研究会でともに学び、言論活動においても協力関係にあった。そして、同様の関係は、横山源之助は片山潜の間にも存在した。また、幸徳秋水と横山源之助は、片山潜を間に挟み、互いの存在を認識しており、広い意味において、労働者の地位向上、社会改革という共通の目標を持って活動していたグループの同志といえるだろう。

この後、幸徳秋水は、1905年、新聞条例に触れて下獄し、出獄後は療養目的で渡米、そして、

滞在していたサンフランシスコで大地震に遭うことになる。社会機能が麻痺した街で、公共機関のサービス（郵便、鉄道など）が無料となり、住民に食料が無料で配給され、貨幣が意味を持たなくなったことは、幸徳に強い印象を残した。この経験がきっかけとなり、「無政府共産」¹¹の実現を強く確信して帰国したことは、周知の事実である。

やがて、社会主義を掲げて社会民主党を立ち上げたかつての同志の間に、方向性や思想上の違いが生じ、メンバーそれぞれが違う方向へ向かうことになり、片山潜もまた、幸徳秋水との思想上の大きな違いを認めざるを得なくなる。1907年、『社会新聞』（1907年）において無政府主義を否定し、幸徳秋水との訣別を表明している。

余は無政府主義の空想を排斥し、今日まで顕はれたる無政府主義の政策手段には、絶対反対を表す。国家の規律を非認し、議会政策を非認する無政府主義者と提携するの余地なきを信ず。（中略）幸徳・堺両兄よ。余は二兄の健在を祈る。予は兄等が再び万国社会党の旗下に来る迄は、兄等と相見ざるべし。

しかし、片山と幸徳の間に、決定的な亀裂が入る直前の1906年には、アメリカ滞在中の幸徳秋水のもとへ、視察で渡米していた片山潜が訪れており、それに感激した幸徳秋水が手記を著わしている。

一昨二十六日テキサスに居ると思つた同志片山潜君が突如として予の室に這入つて来られた時の驚きと喜びとは言語につくせませんでした（『光』一卷六号、明治三九年二月五日）¹²

これをみると、わずか一年ほどの短い期間に、二人の関係にみぞができていく。アメリカ経験は、片山潜と幸徳秋水に、全く異なる結果をもたらすことになったが、それは、片山潜にとって、かつて同じ志を抱いた仲間との絆を断ち切るほどの力を持つものであり、そしてまた、片

山潜にとっては、労働者階級を啓蒙し、成功へと導くための道しるべとなったのである。次節では、片山潜、横山源之助、そして幸徳秋水の三人が論じた海外移民について、その立場の違いを確認したい。

3. 移民に対する姿勢

横山源之助、片山潜、幸徳秋水は、それぞれが新聞や雑誌上で活発に移民論を発表していたが、1907年のサンフランシスコにおける反日暴動、1908年の紳士協定締結と、アメリカへの渡航が次第に厳しくなっていく中で、彼らの活動にも変化が表れてくる。片山潜は、労働者の啓蒙活動に、より力を入れるようになり、横山源之助はアメリカ移民から南米移民へと関心を移していく。そして幸徳秋水は、日本が欧米先進諸国とは異なる移民政策をとるべきと唱えている。この節では、彼らが移民の必要性を、どのような立場から訴えていたのか、それぞれの違いをみていきたい。

片山潜は、自分自身の経験をもとに著わした『渡米案内』（1901年）の冒頭で、総論として次のように意見を述べている。

我日本に於ける人口増加の如何を見るに、我等同胞は三千五百万人なりと称して、我国力を顕揚せしことはこれ昨今のことなりしに、今や我同胞兄弟を四千万人なりと称するに至りしことは、実に驚くに堪へたりと言ふべし（中略）日本における我國民の数は、日一日と増加し来れることは其統計に依りて明らかなり、若この疆りある日本の土地において、無限に其國民が増加せば、我々同胞は如何に将来進歩して、我々の一身を維持し至りなば宜きや¹³

片山は、人口が増加により土地不足が引き起こされる可能性を示唆しているが、これは、農業国として日本が発展する限界を指摘したものである。

人口増による土地（耕作地）不足、そして労働市場の拡大の必要性については、横山源之助も意識しており、1904年に発表した移民論「朝

鮮に於ける日本人労働者」（『実業世界 太平洋』、第二巻第三号一四号）の中で、チャンスの少ない国内より、海外へ目を向けることを呼びかけている。

奉公人の給料は、本邦内地と比べては、よほどの相違がある、商業に志あつて、資産を有せざる商界の青年諸君は、階級多き内地の商売屋にヘコたれて居るよりは、一ツ朝鮮に出でんことを奨むる。¹⁴

さらに、横山源之助は、1912年、ブラジル視察旅行に出かけているが、帰国後発表した「好望なる南米移民」（『海の世界』第七巻第二号、1913年2月1日）の中で、南米移民の有望さを説いている。

◎大に移民を実行すべし

米価が頗る昂騰して、生活難の苦しき叫び声は日に増し加はるのが、日本今日の状態である。狭い猫の額のやうな土地に、今でさへ一ぱいの人がアクセクして居るのに、年々五十万の人が増加する日本で、其日?の生活にさへ苦しんで居るよりは、遠く海外に発展して、新植民地を開拓し其処を己れの領土として、新らしき生活を営んだならば、これ程愉快なことはなからうと思ふ。¹⁵

また、続けて同じ記事の中で、英国の発展が移民によってもたらされたものだと述べている。

◎移民の性格改善

今日殖民を以て成功して居る英国を見よ。貴族と雖も二男三男に生まれたる者は、内地の小成に安んぜず、大なる成功を期して、海外に出稼ぎした賜物ではないか。¹⁶

横山源之助が描く移民先の土地は、旧弊な身分制に縛られることのない、可能性に満ちた自由な土地というイメージで描かれている。

では、幸徳秋水の場合はどうだろうか。片山潜、横山源之助など、身近な人々の間で展開さ

れている移民についての議論を、幸徳は十分認識していたと思われるが、片山や横山が、個人の成功という視点で移民を論じているのに対して、国家という視点から、否定的な見解を示している。

次の記事は、幸徳が『万朝報』（1900年11月17日）において、移民政策が帝国主義の手段となっているとして非難したものである。

「排帝国主義論」

帝国主義即ち領土拡張の主義は、移民の必要を以て名となせり、（中略）見よ多数の下層人民は食物に欠乏せり、衣服に欠乏せり住居家具日用品及び娯楽に欠乏せり、唯だ資本家の強欲暴利を占むるが為めに、彼等を困欠せしめたるのみ、彼等資本家は既に自国の下層人民を困欠せしめて、更に自己の強欲暴利の為に政治家を籠蓋して其市場を海外に求めんとする者のみ¹⁷

幸徳秋水は、帝国主義を否定し、また非戦の立場から、国内問題、国際問題について発言していた。そして移民が、土地不足や貧困問題の解決策として論じられることについて、それをはっきりと批判している。1901年に刊行した『二十世紀の怪物帝国主義』の中で、幸徳は、イギリスとドイツの移民政策を例に挙げている。

英独の帝国主義者が大帝国建設を必要とする論拠は移民に在り。彼らは揚言して曰く、今や我国の人口歳に繁殖して貧民日に増加す、版図の拡張は過剰の人口移住の為に已む可らずと。一見甚だ理有るに似たり。（中略）夫れ富既に世界に冠たり、而も貧民の日に増加する者、豈に人口充溢の罪ならんや、蓋し其因由の別に存するなくんばあらず。然り彼等が貧民の増加は、実に現時の経済組織と社会組織の不良なるが為めのみ¹⁸

幸徳秋水は、移民推進論者が根拠とする土地の不足、人口過剰などが、帝国主義の隠れ蓑になっていることを鋭く指摘している。また、貧

民の増加は、人口が国土に対して過剰なためではなく、国家体制の不備のためだと明言している。片山潜や横山源之助が、近代工業化へと進む過程で都市に出現した貧困や労働者問題の解決策として移民政策を掲げているのに対して、幸徳は、そのような状況を作り出した国家そのものを批判しているのである。

しかしながら、幸徳秋水は、非戦の立場を貫こうとするあまり、移民問題について矛盾した発言もしている。日露戦争開戦の直前には、開戦に反対する意見を唱え、「兵は人の命を奪ひ、財産を失ひ、多数人民の進歩、幸福を傷つける、其損害は実に大なるものである」（「非開戦論」『社会主義』七年一五号、1903年）¹⁹と述べているが、この後に続けて、戦争を回避するための移民政策を提案している。

今日、日本の急は魯西亜と戦ふことではない、實際的に経済的に満州に出て行くより他はない。即ち沢山の人間を移住させ、資本を投じて、固着せる土地に密着して、富を吸収するに如くはない。之れでこそ日本は安泰である。今の開戦論のやふに逐ふ一攻める一逐ふ、とこんなことをやっていた日にやア戦争の費用ばかりも続くものぢやない（中略）戦争で逐ひ出すことが出来るといふのは、単に之は空想に過ぎないことで、日本が経済上に勢力を占めぬ中は到底駄目な話である²⁰

また、朝鮮半島については、前述の「排帝国主義」とは打って変わり、「非戦論」（『日本人』一九二号、1903年8月5日）では、逆の主張をしている。

日本にして一挙京釜鉄道を成就し、再挙京義鉄道を成就し、多数の農夫商人を朝鮮に移して、着々其富源を開拓し、経済的に挑戦全土を我手中に握ること、猶ほ露国が満州に於けるが如くにして、其の余力を伸張して、更に満州に入込むに於ては、我国は能動にして露国は所道の位置に立ち、主客全く勢を異にするに至るであろう²¹

経済的に優位となることが他国の脅威をしりぞけることになり、移民がその手段となるという発想が、実質的に帝国主義と同じであるという見方は、ここにはない。これまで幸徳が主張してきた反帝国主義とは矛盾しているが、幸徳にとっては、ロシアとの開戦を避けることが、危急の課題であり、そのための防衛策として移民はどうしても必要なものであった。幸徳秋水は、帝国主義の背景にあるのは、資本家の経済的拡大の欲望だと考えており、その道具となる移民と、国家の領域拡大を担う移民は、別のものと捉えていた。

これまでみてきて、片山潜、横山源之助は、個人に焦点を当てており、幸徳秋水は、より大きな国家という観点から移民問題を論じていたことがわかる。

4. 成功の国アメリカ

片山潜、横山源之助、幸徳秋水の移民論は、フォーカスしている部分に違いはあっても、共通しているのは、国家の安寧と発展、そして国民一人一人の幸福である。三人は、アメリカ移民について、多くの意見を述べているが、これまで見てきたように、彼らの見方は、国家という観点なのか、あるいは個人という観点からなのかという差がある。この違いを踏まえ、この節では、「渡米」が彼らにとって、どのような意味を持つものであったのかをみてみたい。

三人の移民論者の中で、「個人」、「成功」という要素に、最も比重を置いたのは、片山潜である。片山潜は、『労働世界』の主筆を1901年まで務めたが、経営不振もあり、その後雑誌名を『社会主義』、『渡米雑誌』、『亜米利加』、『渡米』などと変更しながら発行し続けた。雑誌は労働者に向けて作られたものであり、彼らの意識改革とともに、成功の手段として渡米を勧めている。

片山潜が、1901年に出版した『渡米案内』は、「渡米」に関する書籍の出版ブームを引き起こすきっかけとなった。片山潜の『自伝』によれば、「『渡米案内』が大当たりし、一週間に二千部も売れた。渡米研究会を開くと、多くの青年がやって来た。雑誌『太陽』でさえ渡米案内

欄を設けて盛んに渡米熱を鼓吹させ、のみならず渡米に関する書物をも発行した」とある。²² 片山潜は、「渡米研究会」を開催し、そこに来た労働者に、英語を教えたり、「渡米」に必要な手続きを教えたりした。帰国後、片山のもとに「渡米」の相談に訪れたのは、人力車夫や、新聞配達人、牛乳配達人、農夫、工場労働者、商店の店員などだった。²³ かつて、自分も活版工をしながら苦学した経験を持つ片山潜は、富裕層出身の若者ではなく、苦学生こそ成功の可能性を持っていると信じ、『渡米案内』の中で次のように述べている。

古今大業を為したる者大発見を遂げたるもの大発明を完成した者は概して金銭ありての所以を以て成功したるにあらざる其の多くは身貧賤より)起こり百難を排して其目的を達したるを世の事を為すは金銭にあらず人なり資産位置にあらず人物と其決心なり(中略)世の事を為すは先つ人物其人にあるを信すればなり思慮と熱心と忍耐ある人に依て成るなり是れ吾人か我苦学生に向かつて渡米を勧むる所以なり²⁴

「渡米」に関する書籍は、『渡米案内』が刊行された年の1901年だけを見ても、『渡米の栞』(一柳松庵〈讓二〉編)、『最近正確渡米案内大全』(島貫兵太夫)などがあり、これ以降も『青年の渡米』(1902年、吉村大次郎)、『現今渡米案内：附・成業のしをり』(1903年、石塚猪男蔵)、『異郷の客：苦学独歩』(1903年、星野徳治)、『渡米羅針』(1904年、天野寅三郎)などの刊行物がある。

ここで疑問が浮かぶ。渡米ブームは、1901年という年に突如として起きたのだろうか。たった一人の人間が書いた渡米指南書『渡米案内』が、起爆剤的な作用を及ぼしたのだろうか。実は、『渡米案内』がブームとなる以前の社会の動きをみても、出身階層が低い若者であっても、成功の夢を抱き、そしてその夢を可能にすべく支援する流れが生まれていたことがわかる。

1871年に、サミュエル・L・スマイルズの*Self-Help* が中村正直によって翻訳され、『西

『国立志編』の題名で出版されると、たちまちベストセラーになり、明治を通して100万部を超えるベストセラーになった。自律の精神を持ち、勤勉、刻苦して成功を収めた一般の人々の話は、明治の若者の心をとらえ、生き方のお手本となった。

そしてまた、資力のない若者を支援する団体「力行会」が島貫兵太夫²⁵によって創設され、キリスト教の立場から苦学生を支援する動きも生まれていた。団体の機関誌『力行』は、1899年に刊行され、途中『力行世界』と名を変え（1913年1月1日）、現在まで続いている。この雑誌もまた、若者が成功する手段として、海外への留学や移民についての情報を提供しており、実際に海を渡り、苦学しつつ学業を修めている苦学生からの通信文などが寄せられている。

そして、渡米ブームと同じ時期、『成功』という雑誌が創刊された。1902年、村上俊蔵が、米国の雑誌、*SUCCESS*（1898年創刊）の日本版『成功』誌を創刊し、この雑誌もまた、「成功」の大きな夢を、若者に抱かせるものとなった。読者欄へは、渡米に関する相談、上級の学校への進学相談などが寄せられ、講読者層は、十代から二十代の商店店員、工場労働者などが主だった。

こうした社会状況を見ると、明治期、中から下の社会階層に、学問を志し、渡米するという希望を持つ若者が相当数おり、渡米情報の需要は、潜在的に高まっていたと考えられる。そのような中で刊行された渡米の手引書は、時流とマッチし大ブームとなったのである。

そして、片山潜と近い関係にあった横山源之助もまた、渡米する若者を主人公にした小説「鉄骨児」を、1898年に片山潜が主筆を務める『労働世界』上で発表している。内容は、経済的困難のために学業を中断せざるを得なくなった若者が、一度は車夫となるものの、学問への思いを断ち切れず、やがてアメリカに旅立とうと決意する、というものである。

作品の発表時期は、『渡米案内』より前であるが、片山潜はこの頃すでに、労働者向けに渡米の勉強会を開いており、物語の筋は、片山潜の日頃の主張に沿ったものとなっている。横山源之助もまた、「渡米」することが社会の中層

以下の若者の成功への鍵と考えていたことがわかるが、のちに、排日運動が強まるアメリカに見切りをつけ、より好ましい移民先として、南米に目を向けるようになった。

この時期の流れを、より大きな視点から見れば、次のように言えるだろう。つまり、日本が近代化へ向かう過程で噴出した社会の矛盾が、貧困、労働者問題となって現れたものの、その先に「渡米」が光明のように、若者の行く手を照らしていたのである。また、旧来の秩序が壊れ、新しい世界観を構築していかなければならない中で、貧しい環境から身を起こそうとすることそのものが、社会の中流以下の若者たちに、道徳的な価値を持つものとして受け入れられたのである。

次に、幸徳秋水が渡米について述べたものをみてみたい。幸徳の視点は、ここでもまた、片山潜や横山源之助とは異なり、個人に軸を置いたものではない。したがって、アメリカ移民に関しての発言は、国家という視点から語られ、必ずしも肯定的な内容ではなかった。幸徳は、サンフランシスコの大地震に見舞われる三ヶ月ほど前、「日本移民と米国」（『日米』1906年、2月20日）という題名で在米の日本人の若者について書いている。

在米の同胞諸公よ、願くば個の根本問題を一考せよ。

人、其故郷を愛せざるなし、其父母妻子兄弟姉妹を愛せざるなし、而も諸公は何ぞ其愛する故郷と、愛する父母妻子兄弟姉妹とを振り棄て、遠く四千里の天涯地角に漂白し居れるや。他なし、諸公の来るは、米国の山水草木の秀麗なるが為めにあらず、米国の人情風情の敦厚なるが為めに非ず、米国の文明開化の愛好すべきが為めに非ずして、実に唯だ其衣食の得易きが為めのみ、換言すれば其生活し易きが為めのみ、唯だ此の如きのみ、是れ極めて明白の事実也、（中略）是れ直ちに「日本の国家は、吾人に生活の権利を保障せず」てふことを意味すれば也。²⁶（注：傍点は原文ママ）

ここには、片山潜や横山源之助のように、

「渡米」イコール「海外雄飛」といった見方はない。また、学生と出稼ぎ移民との区別をしておらず、移民の全てが出稼ぎ人であるかのような一面的な見方しかしていない。幸徳の主張は、国民の生活保障という国家の責務が果たされない時、貧しい人民が移民となって海を渡るというものであり、先述した「排帝国主義」、『二十世紀の怪物帝国主義』に沿った論となっている。幸徳は、移民が生まれる背景を、国家という視点から描いてみせるために、「成功」の可能性を求めた海外雄飛という側面を、あえて見ないようにしている。

興味深いことに、幸徳がこの記事を書いたのは、アメリカ生活を体験している最中のことである。片山潜のアメリカ体験が、労働者階級の若者たちに、「成功」や「海外雄飛」を呼びかける方向性に発展していったのとは大きく異なっている。

片山潜と幸徳秋水の違いはどこから生まれたのだろうか。一つの理由としては、渡米の目的の違いが挙げられるだろう。片山が、貧しい環境の中で艱難刻苦し勉学を続け、26歳にしてようやく「渡米」を果たしたのに対して、幸徳の場合は、病氣療養という名目で、次第に強まる当局からの迫害を避けて渡米したという経緯がある。そして、片山潜が宿願だった高等教育を修了し、その過程で社会主義思想を学んだのに対して、幸徳秋水は、渡米前からアメリカの社会主義者たちとの交流があり、在米中は海外の同志との関係を深めることになった。そして、最終的に行き着いたのは、無政府主義であった。片山潜、横山源之助が、個人ひとりひとりの暮らしを見ていたのに対し、幸徳秋水は、国家と個人の関係、そして国家権力が個人の運命に与える影響を見ていたのである。

片山潜と横山源之助の主張の中心にあったのは、労働者階級の地位向上、そして、中流から下の階層の経済的面で改善であった。そして、幸徳秋水は最後まで、社会の諸問題の根源にある、国家の責任を問う姿勢を貫いたと言えるだろう。

5. おわりに

本論は、明治に移民論が流行した背景と、移民論者たちの主張の論拠を考察した。そこで見えてきたのは、「移民」、「渡米」を推奨し、その必要性を論じている者たちの立場や見方に大きな違いがあったということである。そこで、片山潜と横山源之助、幸徳秋水の移民論を比較し、二つの立場があったことを確認した。

当時、片山潜と横山源之助が目的としたのは、労働者階級の人々の生活・労働環境の向上であり、「渡米」を推奨したのも、彼らの飛躍のチャンスであると捉えたためであった。片山潜は、社会改良家から社会主義者としての思想を発展させていったが、その活動の心髄は、個人の幸福の追求にあったと言えるだろう。そして横山源之助もまた、中流から下の労働者に目を向け、個人の利益を第一に考えた渡米論を展開したのである。

幸徳秋水の場合は、常に、国家という観点から、国の内外の諸問題を見ていた。人々の貧困や労働問題の背後に、常に国家があることを意識し、移民論をより大きな枠組みで論じたのである。そのため、帝国主義と移民が関連するものであると批判する一方で、戦争回避の手段としての移民を唱えるという矛盾も見せることになった。

三人の論の違いは、個人レベルに立脚しているか、国家レベルに立脚しているかの差にあると言える。そして、その姿勢が、三人の活動の方向性に、大きな違いをもたらしたと言えよう。

註

※引用の旧字体は、新字体に改めている。

¹ 日本組合基督教会。アメリカ外国伝道委員会（アメリカン・ボード）から、1869年に日本に派遣された宣教師、D.C.グリーンが中心となり、1886年に設立した。『よくわかるキリスト教の教派』（今橋朗、徳善善和、キリスト教新聞社、2008）57-59頁参照。

² 片山潜『自伝』、岩波書店、1954、213-214頁。

- ³ 前掲書、212頁。
- ⁴ 前掲書、216頁。
- ⁵ 立花雄一『評伝 横山源之助』、創樹社、1974、104頁。
- ⁶ 現在の『毎日新聞』とは違う新聞。横浜本町で設立された新聞会社から創刊され、初代社長を島田豊寛が務めた。1940年廃刊（『明治時代史大辞典』、吉川弘文館参照）。
- ⁷ 幸徳秋水の『労働世界』への投稿記事は、1902年頃に集中しており、「日英同盟と労働者」（1902年5月14日）、「進化説と社会主義」（1902年10月13日）、「読者諸君に一言す」（1902年10月23日）、「新年の希望」（1903年1月1日）、「社会主義と商業広告」（1903年11月13日）などがある。
- ⁸ これ以前に社会研究会が存在したが、立花氏は、貧民研究会に吸収されたと推測している（立花雄一『評伝 横山源之助』、141頁）。
- ⁹ 立花雄一『横山源之助全集』第九卷、法政大学出版局、496-497頁。
- ¹⁰ 1872年生まれ、明治、大正期に活躍した新聞記者、政治家。1998年には『大阪毎日新聞』主筆となる（『新潮日本人名辞典』参照）。
- ¹¹ 「無政府共産制の実現」（『光』一卷十三号、1906年5月20日）、『幸徳秋水全集』第六卷、84頁。震災後、街の運営が軍の管理下によるものであったことへの言及はなく、私有財産が意味を持たなくなったことのみへ目を向けている。
- ¹² 幸徳秋水『幸徳秋水全集』第六卷、日本図書センター、1994、28頁。
- ¹³ 『渡米案内』、渡米協会、1901、1頁（近代デジタルライブラリー）。
- ¹⁴ 立花雄一『横山源之助全集』第七卷、法政大学出版局、2005、35頁。
- ¹⁵ 前掲書、218頁。
- ¹⁶ 注14と同掲書、218-219頁。
- ¹⁷ 幸徳秋水『幸徳秋水全集』第二卷、日本図書センター、1994、464頁。
- ¹⁸ 幸徳秋水『幸徳秋水全集』第三卷、日本図書センター、1994、180頁。
- ¹⁹ 幸徳秋水『幸徳秋水全集』第四卷、日本図書センター、1994、415頁。
- ²⁰ 前掲書、419-420頁。
- ²¹ 前掲書、425-426頁。
- ²² 注2と同掲書、213頁。
- ²³ 注2と同掲書、7-8頁。
- ²⁴ 注2と同掲書、7頁。
- ²⁵ 1866生まれ、仙台神学校出身の牧師。日本力行会の創立者。島貫は他に『最近渡米策』（1904）、『新渡米法』（1911）などの渡米の手引書を出版している（デジタル版『日本人名大辞典+Plus』、講談社、他に「日本力行会」ホームページ参照）。
- ²⁶ 注12と同掲書、53頁。